

国語

注意

- 1 問題は **1** から **5** までで、16 ページにわたって印刷してあります。  
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、  
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを  
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、  
「や」などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。



1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 世界で僅少の草花。
- (2) 水稲の作付け面積を増やす。
- (3) 法令を遵守する。
- (4) 繊細な透かし彫り。
- (5) 目標を公言して自縄自縛に陥る。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) ハイスイの陣を敷く。
- (2) 市政のサツシンに乗り出す。
- (3) 勝敗をキソウ。
- (4) 平和をキキユウする。
- (5) 二つの国はイチイタイスイの間柄にある。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

十四代将軍家茂公は、さつきから悪戯ばかりしている。戸川播磨守が、懸命に書いた千字文のなかの『雲騰致雨露結為霜』という楷書の立派なお手本の方などは見向きもしないで、奉書のお草紙の上に、やたらに筆をのたくらせている。雲と書き始めた文句が、雨とならないうちに、筆がのたくって、竜のようなめちやくちな曲線を、幾つも書いている。一番最初の雲という字でさえ、まだハッキリとした形を成していない。まして騰るといったようなむずかしい字は、まるで書く意志がないらしい。雲の形が、中途からくずれ出して、雲中の竜のようなでたらめな曲線になってしまふのである。そして、時々目がお草紙から離れて、かたわらの金時絵の火鉢の方に移って行く。が、その火鉢の手ざわりの柔らかそうな灰に立てられている線香は、まだ半分もたっていない。それを見ると、いよいよ退屈しはじめた十四代将軍は、二間ばかりの下座にかしこまっているお氣に入りの小姓の一人に、目顔で笑いかけながら、小姓が案内まじめくさっているの、また仕方なしにお草紙に雲と書き始める。が、雲はいつまでたっても、混沌としたままである。雲と書き始めた筆が自由に活発に紙の上を、無意味に一巡すると、家茂公は手荒く新しい紙をめくる。さつきから、何枚も新しい御献上物の奉書をむだにしたかもしれない。奉書のお草紙は、十五枚綴じになっている。線香の方ともかくも、お草紙の方さえ片が付けば、その日のおけいこは終わったことになるのだ。線香がなかなかなかたないと思つた家茂公は、今度は非常手段に出て、お草紙の方を、なすりつぶそうとしていたのである。

戸川播磨守安清は、黙然として家茂公の乱行を見ていた。彼が、習字のお相手として召し出されてからまだ一月もたっていない。片仮名やい

ろは仮名のおけいこが済んで、漢字のお習字に移ることになって、彼はお相手として特に召し出されたのである。林家の人々などを、差しこえてのこうした沙汰は、彼として絶大な名誉であった。彼は、老後のすべてをお役目のために尽くそうとしている。そして将軍家の御手跡を少しでもよくすれば、この上の御奉公はないと思つている。

ところが、肝心の家茂公は、彼が手を執つて、教え始めてから、一画も、まじめに書いたことはない。いろは仮名のけいこのお相手が、大奥の中臈であつたためだろう、習字といえ、ただ悪戯をして、時間をつぶしさえすればいいと思つているらしい。

幼少のおりから、きびしい師について、一点一画も、ゆるがせにしないようにと教えられた播磨守は、書道に対してかなり敬虔な心持ちをいだいている。彼は、口を漱いで手を浄めたあとでなければ筆を執つたことさえない。それなのに、家茂公は彼の面前で、悪戯ばかりしている。書を書くことの尊さを少しも知っておられない。慰み事か、弄び事か何かのように、書を瀆している。家茂公のなすことがすべて、播磨守の心を痛めた。七十を三つも越している一徹な播磨守の心を痛めた。彼は、どうにかして、主君のこうした心がけを矯正しなければならぬと思つた。そのためには、たとい御不興をこうむろうとも、お役御免になろうとも、いとうところはないとまで思つていた。おけいこの日が重なるにつれて、彼の決心はいよいよ堅くなつて来た。ところが、今日は家茂公の悪戯が、いつもよりも、もつとひどい。一字だつてまじめには書かれないのである。

白絹のようにつやつや光る奉書を、五、六枚もむだにして、さらに幾枚目かの紙に、でたらめな曲線を書かれようとした時である。播磨守は無言のまま家茂公の筆を持った手のひらを、キュッと握りしめた。家茂公は、ハツと本能的におどろかされたようであるが、すぐ子供ながらに、<sup>(2)</sup>自分の位置の優越を思い出されると、威圧的なげい目つきで播磨

守の顔を、じっと見られた。が、播磨守はビクともしなかった。彼は、柔らかな小鳥のように生温い掌を、意識して強く、少しは懲罰的に痛さを感じしめるくらいに強く握りしめながら、奉書の上に『雲騰致雨露結為霜』と、書かせた。家茂公は、筋ばった手のひらで握りしめられる痛みに、堪えかねて、中途で二、三度振りほどこうとした。が、播磨守は、<sup>\*</sup>いつかな放さなかったが、その八文字がスツカリ書きおえられた時である。播磨守が、その堅い把握の手をゆるめて、じっと両手を膝に置きながら、公が書いたというよりも、自分の書いた八字にながめ入った時だった。赤くなつた右の手のひらをじっと見ていた家茂公は、机の上にあつた青磁の水入れを、持って立ち上がると、いきなりたつぷりとたたえられていた水を、播磨守の白髪の前へ、ザブリとかけたまま、  
「わあつははわあつははは」と、笑いながら大奥の方へ走り込まれたのである。

一徹な播磨守は、主君から——幼少な年齢から来るいたずらではあるとはいへ——はげしい侮辱を受けたので、頭から落ちるしずくをぬぐいもやらず、机に両手をかけたまま、<sup>3)</sup>しばらくは、身動きもしないで考え込んだ。

おどろいてかけ寄つたお側衆の小出勢州は、懐紙を出して、播磨守の額から顎にかけてふきおろしながら、

「あまりのお悪戯じゃ。御幼少であるとはいへあまりな御乱行じゃ。御主君とはいへ、心外でござろう。拙者から、御大老に申し上げて、<sup>\*</sup>きつい御諫言を申し上げることにいたそう。御勘弁なされい、御勘弁なされい！」と、気の毒そうに慰めた。

播磨守は、黙然として勢州のふくのにかかっていたが、ぬれた上下の威儀を正すと、心持ち声を落としながら、

「井伊公に申し上ぐるなど、軽はずみな事をしてくださるな。今日という今日は、上様の御仁慈のほどが骨身に徹え申したわ。勢州殿、有

様はかようでござる。<sup>\*</sup>拙者今日はお机の前にすわつて以来、しきりに小用を催したのを、じっと辛抱いたしおつたところ、老年の悲しさには、懸命にお手を執つたみぎり、つい失念して尿を少々もらしたのでござる。君前においてかかる大不敬を犯したことが、もし大目付の耳に入らうなら、謹慎閉門はおろか、切腹の御沙汰にも至らうかと、心も心ならず苦慮いたしおつたのを、それとお察し遊ばした上様は、拙者の失策をご自身の悪戯でおおいかくしてたまつたのじゃ。御仁慈のほど、骨身に徹し申したわ。」

と播磨守は、<sup>4)</sup>老いた両眼に涙をヒタヒタとたたえていたのである。  
小出勢州を初め、並み居る近衆たちは、アツとばかり膝をたたいて、家茂公の聡明な仁慈に感嘆の声を上げたのである。

その事があつてから、この逸話は、江戸城のすみからすみへと伝えられた。登城する大名の一人から一人へと伝えられた。皆が異口同音に、名君家茂公の君徳をたたえぬ者はなかった。ただこれを聞いた井伊大老直弼だけは、話を半分ほど聞くと、眉をひそめながら、  
「お悪戯にもほどがあつたものじゃ。」と言つたまま、話し手が家茂公をほめ上げるのを聞いて、<sup>5)</sup>ニコリともしなかった。

(菊池寛「名君」による)

〔注〕雲騰致雨露結為霜——雲がわきおこって雨となり、露が固まって

霜となる、の意。

奉書——純白できめの美しい和紙。

お草紙——練習の字や絵を書く帳面の類。

二間——約三・六メートル。

小姓——将軍のそばで日常の雑務をつとめる者。

手跡——その人が書いた文字。筆跡。

中臈——江戸幕府の女官の一つ。

いとう——好まないで避ける。いやがる。

いっかな——どのようにしても。

青磁——青緑色をした陶磁器。

側衆——将軍のそば近くに仕える者。

大老——江戸幕府最高の役職。この時は井伊直弼。

諫言——目上の人の非をいさめる言葉。

上下——江戸時代の武士の礼服。

仁慈——思いやりがあつて情け深いこと。

拙者——武士が自分をへりくだつていう一人称。

小用——小便のこと。

大目付——諸務を監督する役職。

閉門——武士に科した刑罰の一つ。

近衆——近習。主君のそば近くに仕える者。

〔問1〕<sup>(1)</sup> いよいよ退屈しはじめた十四代将軍は、とあるが、この時の

心情の説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 書いても書いても終わらない書の時間にいらだち、あえて適当に筆を動かして紙を使ううちにより不機嫌になってきた。

イ 落ち着いて書に向きあえず、時々頭を上げては気乗りのしない書の時間を意識して、ますますこの場が嫌になってきた。

ウ 面倒な書の時間にお気に入りの従者は相手になってくれず、漢字を書くことがますます面白くないものになってきた。

エ 書の時間に真面目に取り組むつもりはなく、難しい漢字を避けて適当に書くうちに、次第に気持ちが離れてしまった。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 自分の位置の優越を思い出されると、とあるが、播磨守の

行動に対する家茂公の心の動きを、次の【】にあてはまるように三十字以上四十文字以内で書け。

【】 威圧的な目つきで播磨守をじっとご覧になった。

〔問3〕<sup>(3)</sup> しばらくは、身動きもしないで考え込んだ。とあるが、なぜか。その理由として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 不始末を犯してしまった恥ずかしさのために身を小さくしながら、

家茂公の思いやりをどう伝えるかを考えていたから。

イ 家茂公の心ない振る舞いに身を固くしながら、この事態をどのように乗り切るのが最善かを少しの間、考えていたから。

ウ 自分が書き上げた八文字を不満げに見ていたことを反省し、水をかけてしまった家茂公の名誉回復の策を考えていたから。

エ 幼少とはいえ将軍である家茂公に水をかけられ恥辱にまみれて、自分の進退はきわまつたと、処罰のことを考えていたから。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 老いた両眼に涙をヒタヒタとたたえていたのである。とはどのような様子をあらわしているのか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 周囲の者には畏敬の涙に見えるが、書を厳しく指導してきた自分に對して思いやり深く対処された家茂公に驚き、涙ぐんでいいる様子。
- イ 周囲の者には安堵の涙に見えるが、家茂公のこれまでの振る舞いを思い出して、老年に待っていた不遇に悔し涙を浮かべている様子。
- ウ 周囲の者には感動の涙に見えるが、書に身を捧げてきた自分の志が家茂公に伝わらず、あれこれ情けなくて涙がこみ上げている様子。
- エ 周囲の者には羞恥の涙に見えるが、不始末を犯した自分の無礼をとがめず、守つてくださった家茂公への感謝の涙があふれている様子。

〔問5〕<sup>(5)</sup> ニコリともしなかった。とあるが、この時の様子の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 播磨守が「井伊公に申し上ぐるな」と口止めしたことを井伊大老は耳にして、播磨守にも怒りを感じた。
- イ 井伊大老は、江戸城に集まる大名がこぞつて家茂公を賛嘆するため、自分の権威低下を憂えて眉をひそめた。
- ウ 播磨守が予測したとおりに、幕府最高の役職に就く井伊大老は、家茂公のあまりの幼さにあせんとした。
- エ 井伊大老は、家茂公が水をかけたことを仁愛の行為とはみなさず、悪質な仕返しであると不愉快になった。

〔問6〕 本作品の表現や構成について述べた説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 家茂公のすることが「播磨守の心を痛めた」と二度書くことで、長年ひたむきに生きてきた播磨守の姿が読者に伝わるようにしている。
- イ 本文中の擬声語・擬態語はすべて片仮名で表現されており、読者に視覚的に訴えかけられるように作者の工夫が細部に徹底されている。
- ウ 本文は播磨守の視点から見たものが描かれており、彼以外の登場人物の心情は、動作や会話の描写から読み取れるようになっていいる。
- エ 「名君」という題名には、本文に描かれる家茂公のように仁徳ある君主こそが名君であるとの登場人物や作者の意識が表現されている。



次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

\*  
フーコーによれば、「自己への配慮」は、古代ギリシアの思想の全体を貫通している中核的な観念です。古代の成年男子は、自分自身を自分で配慮できなくてはならない。そういう自己への配慮を実現するために、どのような訓練をすればよいのか。そういうことが、古代ギリシアでは徹底的に探究され、フーコーはそれを掘り起こしています。（第1段）

たとえば、ギリシア思想の中心テーゼ\*として、とりわけソクラテスの名と結びつけられているテーゼとして、「汝自身を知れ」という命令があります。これも、自己への配慮の思想の一部です。ただし、「一部」ではない。ソクラテスが、アテナイの道行く人をつかまえては説いたのは、自分にとって付属物であるようなものを、自分自身に優先させてはならない、ということとです。「自分にとって付属物であるようなもの」というのは、富とか地位とかのことです。現在でも、いや現在においてはなおのこと、私たちは付属物を優先させていますが、<sup>(1)</sup>ソクラテスはそれを戒めていた。そして、自分自身に気をつけて、できるだけ善い者となるように、思慮ある者となるように配慮しなさい、と説いたわけです。これが「自己への配慮」です。（第2段）

自己への配慮ということの意味は、自己が自己自身を統治できるようにすることです。そのような自己への配慮を保持するための「生の技法」が、古代ギリシアでは探究されていた。フーコーは、この生の技法によって、<sup>(2)</sup>牧人型の権力の支配から逃れる、抵抗の拠点を確保できる、と考えていたのではないのでしょうか。羊が自分で自分を統治できていれば、牧人に頼る必要はなくなるのですから。そして、牧人型の権力こそは、やがて、規律訓練型の権力、つまり近代的な権力へと成長するわけですから、フーコーの晩年の研究は、まことにアクチュアルな問題

意識に支えられていた、ということになるわけです。（第3段）

古典古代における「自己への配慮」という観念を探究する中で、フーコーの関心はやがて、「パレーシア」というギリシアの概念に集中していきます。「パレーシア」とは、率直な語り、真実を語ることに、真理への勇氣等を意味するギリシア語です。自己への配慮を通じて、真理へ到達した主体は、パレーシアを実践するはずで、したがって、「自己への配慮」が古代ギリシア思想の中心的な観念であるとすれば、パレーシアは、その中心の中のさらなる中心である、ということになります。（第4段）

パレーシアが何であるかを知るためには、パレーシアがことさらに強調されるとき、それが何と対比されているのか、を見るのが重要です。古典古代の文化の内部にあるもので、フーコーがパレーシアと鋭く対立する実践と見なしていたのは、「レトリック」です。パレーシアとは、端的に言えば、「真理を語ることに」です。それに対して、レトリックの眼目は、「うまく語ることに」にあります。レトリックの教師の典型は、ソフィストです。それに対して、ソフィストに対抗し、彼らの欺瞞を暴いたソクラテスこそは、パレーシアの人だと言えるでしょう。（第5段）

パレーシアは、権力への対抗のための根拠となりうるのでしょうか。フーコーが（密かに）求めていたものは、パレーシアにあるのでしょうか。少なくともこういうことは言えるのではないかと、思います。パレーシアは、つまり真理についての率直な語りは、当時の権力にとっては、脅威だったのだ、と。そのことは、よく知られているソクラテスの最期<sup>(さいご)</sup>を思い起こせば、容易に想像がつかみます。彼は、当時のアテナイの支配層、アテナイの民会の意志を左右できるような影響力の大きい者たちにとって、うとましく感じられた。ソクラテスは、ついに民会で死刑を言い渡され、（友人や弟子たちが逃亡を勧めたにもかかわらず）毒杯を仰いで死んだことは、パレーシアの人であるソクラテスが、体制にとつてきわ

めて危険な因子と見なされたことを示しています。(第6段)

ソクラテスの「パレーシア」をめぐる実践がどのようなものだったのか、もう少し詳しく見ておきましょう。ソクラテスは、公人としての活動を拒否したことで知られています。それは、アテナイの直接民主主義の政治参加から身を引くということです。しかし、アテナイの市民にとって、公人として直接民主主義に参加することはとても名誉なことですから、これを拒否するというのはよくよくのことです。(第7段)

すると、ソクラテスは政治に無関心で、私的な世界に閉じこもった、というイメージをもつかもされません。「パレーシア」とは、それは、私的な趣味のように真理を探究したということだ、と思われるかもしれませんが。しかし、そうではありません。そうではない、ということを理解することが肝心です。(第8段)

まず、ソクラテスがパレーシアに忠実であろうとしつつ、他方で、民主主義の政治から撤退したということには、<sup>③</sup>逆説があるということを理解しなくてはなりません。もともと、パレーシアと民主主義とはまっすぐにつながっていたのです。フーコーは、パレーシアこそ本来は、民主主義の倫理的な基盤であった、と述べています。いかなる虚飾も無いもなく、自分が確信するところの真実を、勇気をもって、危険をもと<sup>④</sup>もせず<sup>⑤</sup>に語ることに、これが民主主義が機能するための必須の条件であることは、すぐにわかるでしょう。アテナイで「パレーシア」ということが大事にされたのは、そこに民主主義があったからです。つまり、もともと、パレーシアと民主主義は表裏一体の関係にあったわけです。だから、パレーシアに対して忠実であろうとするソクラテスが、民主主義の政治にはコミットしないと表明するということは、とても奇妙なことなのです。(第9段)

どうしてこんなことになったのか。それは、ソクラテスの時代のアテナイの民主主義はすでに腐敗し、墮落していたからです。もう少ししてい

ねいに言えば、富の不平等から来る、政治的影響力の不平等が、民主主義に影を落としていた、ということなのです。そういう不平等がある中で、民主政の「ゲーム」に参加したらどうなるのか。<sup>④</sup>そういうゲームで成功するためには、パレーシアよりレトリックを優先させなくてはなりません。真実を言うより、言葉たくみに話して、影響力のある人や大衆の願望に迎合したり、それを操作しなくてはならなくなる。「ほんとうのこと」を率直に語る人は、そのような民主主義では敗者になり、最悪の場合には、排除されます。実際、ソクラテスの死後に出てきたアテナイの政治家デモステネスは、当時のアテナイの大多数の市民にとっては不快な真実を、隣国マケドニア王国の危険や陰謀を語ったがために、市民たちの怒りを買って、結局、亡命を余儀なくされるのです。(第10段)

ソクラテスが公人としての政治参加を拒否したのは、彼が私的なことにはしか関心がなかったからではなく、むしろ、彼が真に政治的な人物だったからです。彼は、富の不平等によって歪められている民主主義に参加すれば、その不平等を強化することにはかならないことを理解していたのでしよう。このとき、真に政治的、真に公人であろうとすれば、かえって、私人に徹しなくてはならない、という逆説が出てくるのです。この点は、ずっと後、十八世紀の終わりのころ、カントが『啓蒙とは何か』(一七八四年)で述べたことを思わせます。カントは、理性を公共的に使用するためには徹底した私人でなくてはならない、という趣旨のことを言っているからです。(第11段)

しかし、公人として直接民主主義の国事に関わらないのだとすると、どうやって政治をしたのでしょうか。どのようにパレーシアが活かされたのでしょうか。ソクラテスが実際に行ったことは、広場に出かけて、誰彼となく市民に話しかけ、問答に巻き込むことでした。<sup>⑤</sup>この問答のやり方は、いささか変わっていました。これは、自らのまことに正直なパレーシアを通じて、相手にもパレーシアを实践させてしまう手法、と

でも言うことができます。(第12段)

つまりこういうことです。ソクラテスは、問答の相手が提示した命題を否定したり、それに別の真なる命題を対置したりはしません。相手の命題をまずは全面的に肯定してしまうのです。その上で、ソクラテスは、問答を通じて、この命題から、反対の命題を引き出しうることを示すのです。そうすると、自然と、相手は自分の前提が虚偽であったことを自覚するようになります。自分が真理であると信じていたことが、そうではなかったということを公然と認めざるをえなくなるわけです。言い換えれば、相手は、自分が実は何も知らなかったということを率直に認めるパレーシアを遂行せざるをえなくなるのです。だから、ソクラテス自身も真理を教えるわけではありません。そもそも、ソクラテスは、何も知らないであり、そのことを、まさにパレーシアとしてはつきりと認めることから始まっているがゆえに、相手のパレーシアを引き出すことに成功しているわけです。(第13段)

これがソクラテスの政治の実践でした。これが、当時のアテナイの支配層にきわめて危険な行いと見なされ、ついに、ソクラテス自身がそこから身を引いた民主主義を通じて、ソクラテスへの死刑判決が下された、ということとは先ほど述べた通りです。(第14段)

(大澤真幸「社会学史」による)

〔注〕 フーコー——ミシェル・フーコー。フランスの哲学者。

テーゼ——命題。ある判断を言葉で言い表したもの。

アテナイ——古代ギリシャの都市国家の名。現在のアテネ。

アクチュアル——現実の。

レトリック——表現効果を高めるための技法。修辞。

ソフィスト——弁論や修辞などを教えることを職業とした人。

直接民主主義——国民や住民がその代表者によらず、直接政治的

決定をする考え方。

銜<sup>で</sup>い——才能、知識があるようにひけらかすこと。

コミット——関わりを持つこと。

〔問1〕<sup>(1)</sup> ソクラテスはそれを戒めていた。とあるが、どのようなことか。本文の語句を用いて四十五字以内で説明せよ。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 牧人型の権力の支配とあるが、それはどのようなことか。

次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 牧人が羊の群れの世話をするように、民衆が不満を主張することのない状態を統治者が保つていくこと。
- イ 牧人が羊の群れを危険から守っていく中で、民衆の意見も取り入れつつ権力者が安全を保証すること。
- ウ 牧人が羊の群れを訓練していく中で、民衆が自己規制できるように統治者が誘導していくこと。
- エ 牧人が羊の群れを統率していくように、権力者が民衆を誘導しながら統治していくこと。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 逆説の説明に当たる三十文字の箇所を本文から抜き出し、そのまま記せ。

〔問4〕<sup>(4)</sup> そういうゲームで成功するためには、プレイヤーよりレトリックを優先させなくてはなりません。とあるが、それはなぜか。

次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 真実を話すことよりもうまく表現することで一般民衆の心をつかみ、政治家として認められていく必要があるから。
- イ 富の不平等が政治的影響力の不平等を招くので、政治家としてうまく民衆を説得しないかぎり民主主義は成立しないから。
- ウ 権力争いを繰り返していく中で、政治家として国家を統治していくためには一般民衆を上手に言いくるめる必要があるから。
- エ 真実を話していても、多数の民衆に正しく伝わらなければ民主主義の社会では政治家として敗者となり排除されてしまうから。

〔問5〕<sup>(5)</sup> この問答のやり方は、いささか変わっていました。とあるが、どのような点で変わっていたのか。次のうちから最も適切なものを選び。

- ア 相手が提示した命題を否定したり、パレーシアではない別の命題を対置したりするという方法をとっていない点。
- イ 相手の命題を肯定し反対の命題を引き出すことで、自分の無知を自覚するというパレーシアに気づかせている点。
- ウ 相手の命題を肯定することで、最初からパレーシアは人々の心の中に存在しているのだと相手に自覚させている点。
- エ 相手の命題をまずは全面的に肯定してしまい、パレーシアの本来の意味をもう一度相手に考えさせるきっかけを与えている点。

〔問6〕 本文全体を段落分けした場合に最も適切なものを次のうちから選べ。

- ア 第1段～第3段、第4段～第6段、第7段～第14段
- イ 第1段～第4段、第5段～第11段、第12段～第14段
- ウ 第1段～第3段、第4段～第8段、第9段～第11段、第12段～第14段
- エ 第1段～第4段、第5段～第6段、第7段～第11段、第12段～第14段

〔問7〕 筆者は「いかなる虚飾も衒いもなく、自分が確信するところの真実を、勇気をもって、危険をもとめせずに語ること、これが民主主義が機能するための必須の条件である」と述べている。このことについてあなたはどのように考えるか。この文章を読んだ次の五人の発言やその主旨を用いる場合は、「Aが述べているように」、「Bの意見」等、アルファベットをそのまま利用して構わない。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や。「などもそれぞれ字数に数えよ。」

- A 「率直な語り、真実を語ること、真理への勇気」を意味するパレーシアは今の社会においても大切なものだよ。
- B そうそう、パレーシアは大切。真実、真理は一つなんだから、正しいことを堂々と語らなきゃいけない。
- C 真実、真理が一つって言う考えはどうか。確かにうそは困るけど、人によってものの見方が異なることってあると思う。
- D レトリックは「うまく語ること」って書いてあったでしょう。ものは言いようっていうじゃない。ちゃんと状況を考えて話さないよ。
- E 「ものは言いよう」ってそれはやっぱりうそをついているってことだよ。私もパレーシアが大事だと思うけど、一つの出来事に対して色々な見方があることも確かだね。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、本文中に引用されている原文の後の〔 〕内は、現代語訳である。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

四季と恋は『古今集』の、そして古典和歌の二本の柱となるテーマである。この二つを中心にして、『古今集』は人が生きる中で味わうことになるさまざまな「こころ」、たとえば子ども誕生の喜び、長寿のめでたさ、老いの嘆き、死別の悲しみ、旅立つ者の思い、旅のさなかの哀感、日常生活の折々に心をよぎる感情などを集成し、分類している。情趣を解する人は、何をどのように感じるのか、そして、それはどのような「ことば」で表現されるのか——『古今集』は一つの歌集であると同時に、かくあるべき「こころ」と「ことば」の見本帖である。

もちろん『古今集』に先行して『万葉集』や漢詩文のアンソロジーが存在しており、それらの中でも何らかの基準によって詩歌を分類・配列することが行われている。『万葉集』の中には、収集した歌をテーマによって雑歌・相聞・挽歌の三つに分類したり、時代や詠作年次の順に並べたり、「花を詠む」「鳥に寄す」などの小見出しを設けてまとめたりする編纂の工夫が認められる。しかし、一つの歌集の中で、およそ和歌に詠まれ得るすべての「こころ」、つまり人間の感情生活の全体を網羅的・体系的に捉えて、各巻のテーマとして掲げたのは、『古今集』が最初であった。

『古今集』はまた、各巻内部の歌々の配列にも意匠を凝らしている。たとえば四季歌では、歌を並べることによって、立春から歳暮に至る四季の推移が写しとられている。恋歌では、恋の始まりから終焉に至る顛末が描き出されている。そして連続する歌々は、ちようどののちの時代の連歌を先取りするかのように、なめらかな「ことば」の連想関係

によって結ばれている。こうしたことも『古今集』が創始した方法であった。<sup>(1)</sup>『古今集』とは、歌集の〈型〉を創造した画期的な編纂物なのである。

『古今集』を代表する歌人を一人挙げるとすれば、それはまちがいない紀貫之であるが、もしも業平の存在がなかったら、この歌集の魅力は三割がた目減りしてしまうのではないだろうか。<sup>(2)</sup>業平の歌はいかにも『古今集』的な表現技巧を駆使したものでありながら、貫之とはまた異なった特質を備えている。そして『古今集』は、そのような業平の歌に詳細な詞書を添えて、要所に位置づけている。『古今集』の撰者たち、とりわけ貫之は、みずからの理想とは少し異なるのである。業平の歌を、深く理解し、敬意とともに『古今集』の中に取り入れており、業平の存在は『古今集』を成り立たせる力源の一つとなっているのである。

業平は、平城天皇の第一皇子である阿保親王の五男として生まれた。母は桓武天皇の皇女伊都内親王。父母双方から皇族の血をひく貴種である。しかし平城天皇は、弟の嵯峨天皇に譲位したのちの弘仁元年（八一〇）に、いわゆる「薬子の変」を起こして失敗、そのまま出家しており、阿保親王もこの事件に連座して、一時期大宰府に左遷されていた。平城天皇の系譜は、業平が生まれる以前に、皇位継承とは無縁になっていたのである。

業平の歌を読んでみよう。『古今集』賀に<sup>(3)</sup>収められる歌。晴れやかな宴の場で詠まれた歌である。

#### 原文1

堀河の大臣の四十の賀、九条の家にてしける時によめる

在原業平

現代語訳1

堀河太政大臣の四十の賀が、九条の屋敷で行われた時に詠んだ歌

(片桐洋一「古今和歌集全評釈」による)

桜花散りかひくもれ老いらくの来むといふなる道まがふがに

(賀・三四九)

桜の花よ、散り乱れてあたりを曇らせておくれ。「老い」がやってくると言われている道が、まぎれてわからなくなるように。

「堀河の大臣」とは藤原基経のこと。基経は貞観十七年(八七五)に四十歳となり、藤原氏の本拠地の一つである九条邸において、長寿を祝う宴が催された。列席した業平は、基経のもとに「老い」がやって来ないように、と歌う。「老い」がやって来る道があると言われるが、桜の花よ、紛々と散り乱れて視界を曇らせてしまっておくれ、と。いつまでも若々しくあってくださいという寿ぎの歌なのだが、その一方で、桜吹雪の向こう側から避けがたい「老い」がひたひたと近づいてくるといふ、冷厳な真実も見据えられている。現代の私たちは、大鎌を振りかざした西洋風の死に神のイメージを持っているが、「老い」を擬人化したら、どのような姿になるのだろうか。昭和の無季俳句「戦争が廊下の奥に立つてゐた」(渡辺白泉)などにも通じるような、本来かたぢのない概念を生々しく具現化する、擬人法の力が働いていよう。

業平の歌は『古今集』賀の中でも出色の名歌であるが、いささか「型破り」でもある。賀宴の歌は多くの場合、鶴、亀、松、千代、八千代、万代、千歳などの瑞祥を連ねて詠まれる。業平の歌が賀歌として期

待される〈型〉から逸脱していることは明らかであろう。

『古今集』雑下に収められる歌で、『伊勢物語』八十三段でも知られる。

原文2

惟喬親王のもとにまかり通ひけるを、頭おろして小野といふ所に侍りけるに、正月に訪はむとてまかりたりけるに、比叡山の麓なりければ、雪いと深かりけり。しひてかの室にまかりいたりて拝みけるに、つれづれとして、いともの悲しくて、帰りまうで来てよみておくりける

在原業平

現代語訳2

惟喬親王のもとによく行っていたのですが、親王は出家剃髪して、小野という所にいましたので、正月にお見舞いしようと思っ出てかけましたところ、そこは比叡山の麓だったので、雪がたいそう深かった。無理をして親王の庵室に行き着きまして、拝顔いたしましたところ、親王は所在ない様子で、何となく悲しそうであつたので、京に帰って来ましてから、詠んで送った歌

(片桐洋一「古今和歌集全評釈」による)

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪踏みわけて君を見むとは

(雑下・九七〇)

つい現実を忘れてしまって、夢ではないかと思うことです。かつて一度でも思ったでしょうか、深い雪を踏み分けて、わが君にお会いすることになろうとは。

惟喬親王は文徳天皇の第一皇子、母は紀名虎の娘の三条町（紀靜子）である。惟喬親王は父帝に愛されたと言われるが、染殿后明子を母に持つ弟（のちの清和天皇）が生まれたため、皇太子になることはできなかつた。業平は紀氏の女性を妻としていた関係からか、かねてから親王と親交を結んでいた。

紀氏と在原氏の期待を担った惟喬親王が、二十九歳の若さで突然出家をしたのは、貞観十四年（八七二）七月のことであつた。髪を下ろした親王は、比叡山の麓に近い、洛北の小野の里に隠棲した。翌年の正月、慕わしい親王に拜謁するために、業平は深い雪を踏み分けて訪ねて行く。ひとりぼっちの親王の姿に心を痛めた彼が、都に帰つたのちに詠んで贈つたのが、「忘れては」の歌であつた。業平は出家姿の親王に対面した今なお、あるいは今だからこそ、事の成り行きを「夢」ではないかと「思ふ」。そして「……思ふ／思ひきや……」という同語の反復を跳躍台として、残酷な現実から幸せであつた過去へと「こころ」を飛翔させていく。この歌は、予想外の運命の転変に遭遇した感慨を、そのまま大づかみに捉えている。

業平は、貴族社会の華やかな社交の場において、また失意の親王の傍らで、折に触れて歌を詠んだ。歌は日常生活の彩りであり、人々をつなぐ社交の具であり、<sup>5)</sup> 個の「こころ」を託すかけがえのない器でもあつた。そして、それらさまざまな業平の歌には、大胆な「擬人法」や「見立て」、倒置法や同語反復などの、鮮やかな「ことば」の技が認められる。歌全体の骨格をなす大振りな技巧は、業平の歌を特徴づけるものである。

（鈴木宏子「古今和歌集」の創造力」による）

〔注〕アンソロジー——詩文などの選集。

各巻のテーマ——『古今集』では、「春上」「春下」「夏」「賀」「離別」など二十巻に分類されている。

意匠——工夫。趣向。

顛末——事のいきさつ。一部始終。

紀貫之——平安前期の歌人。『古今集』編纂の中心的役割を果たした。歌風は理知的・技巧的で、繊細優美な古今調を代表している。

業平——在原業平。平安前期の歌人。六歌仙の一人。

詞書——和歌を作った日時・場所、成立事情などを述べる前書き。葉子の変——八一〇年、平城遷都を主張する平城上皇と嵯峨天皇

が対立して二所朝廷と呼ばれる混乱が発生したが、天皇側が迅速に兵を出して勝利した政変。

大宰府——律令制で、筑前の国（現在の福岡県）に置かれた役所。

擬人——人間以外のものを人間にたとえて表現すること。

渡辺白泉——昭和初期の無季派の俳人。

瑞祥——めでたいしるし。

染殿后明子——当時、右大臣であつた藤原良房の娘。

清和天皇——文徳天皇の第四皇子。母は藤原明子。幼少で即位したため、外祖父藤原良房が摂政となつた。

隠棲——俗世を離れて静かに暮らすこと。

拜謁——身分の高い人に会うことをいう謙讓語。

見立て——対象を他のものになぞらえて表現すること。



〔問1〕『古今集』とは、歌集の〈型〉を創造した画期的な編纂物なのである。とあるが、どういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

- ア 『古今集』とは、人間の感情や四季の美しさを率直に歌い、見出しを設けてそれぞれの歌をことばの連想によって結びつくようにした歌集の〈型〉を創った編纂物であるということ。
- イ 『古今集』とは、『万葉集』の分類の仕方を踏襲し、四季や恋の歌は始まりから終わりまでの推移を描き出して理知的に表現する歌集の〈型〉を創った編纂物であるということ。
- ウ 『古今集』とは、四季の美しさや恋の繊細な感情をその推移に従って象徴的に表現し、歌のことばが対照的になるように配置される歌集の〈型〉を創った編纂物であるということ。
- エ 『古今集』とは、四季や恋の歌は始まりから終わりまでの推移を描き出し、連続する歌々がことばの連想関係によって結ばれている歌集の〈型〉を創った編纂物であるということ。

〔問2〕業平の歌はいかにも『古今集』的な表現技巧を駆使したものでありながら、貫之とはまた異なった特質を備えている。とあるが、貫之の歌と異なった業平の歌の特質とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

- ア 業平の歌は貫之の歌とは違い、初老を祝うことばを使って自由奔放に「賀」の歌を詠むなど、期待される典型的な〈型〉から外れているという特質をもっているということ。
- イ 業平の歌は貫之の歌とは違い、「賀」の歌に瑞祥のことばを入れずに詠むなど、典型的な〈型〉から外れ、同語反復や大胆な擬人法といった特質をもっているということ。
- ウ 業平の歌は貫之の歌とは違い、どの歌もみな歴史的な事実と自らの感慨を中心に詠み、人間のはかなさや世の無常を巧みに表現しているという特質をもっているということ。
- エ 業平の歌は貫之の歌とは違い、「賀」の歌に寿ぎのことばを入れて期待される〈型〉を踏まえ、貫之の歌には見られない見立てや倒置法といった特質をもっているということ。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 収とあるが、ここでの「収」と同じ意味の使い方として最も適切なものを、次のうちから選べ。

- ア 収録
- イ 収縮
- ウ 収得
- エ 収穫

〔問4〕<sup>(4)</sup> 本来かたちのない概念を生々しく具現化する、擬人法が働いているか。とあるが、「桜花」の歌のどの部分に擬人法が使われているか。それに相当する語句を和歌の中から七字で抜き出せ。

〔問5〕<sup>(5)</sup> 個の「こころ」を託すかけがえない器とあるが、「忘れては」の歌には業平のどういう「こころ」が表現されているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 親王のもとを訪ねた業平は、親しく接していたことを忘れてしまっていたが、また親王のもとでお役に立てる喜びを感じている。
- イ 業平は閑居の日々を過ごす親王の姿に接して同情し、都での生活はあるものの、このままずっとお側にいたいと心に決めている。
- ウ 雪深い山里の庵室で孤独に過ごす親王のもとを訪ねた業平は、僧形の親王の姿に心を痛め、その数奇な運命を嘆き悲しんでいる。
- エ 業平は隠棲してひとり暮らしで暮らす親王をいたわしく思い、都に戻る前に歌を詠んで、二人で過ごした幸せな日々を回顧している。

2  
1  
0

1  
0

5  
0